

江東区立小学校のうち、13校には特別支援学級（なかよし学級）が設置されています。

今回は、なかよし学級での俳句授業の様子をお伝えします。

2月の高学年（5・6年生）のクラスです。「立春」を経て、春の俳句を作ろうと予定していましたが、当日の1時間目に、家庭科「お茶の入れ方」の学習をしたということで、その体験を詠むことにしました。「お茶」を詠むとなると季節はどうなるかという問題も出てきますが、季節以上に新鮮な体験を大切にしました。

（歳時記には「茶摘み」や「八十八夜」は「春」、「新茶」は「夏」、「製茶」や「茶揉み」は「晩春」とあります。日本人とお茶の関係の深さを感じます。）

講師が「色は?」「香りは?」「どうやって入れたの?」「茶碗を触った時に何か感じた?」「周りの様子は?」などと語りかけ、感覚を呼び覚ましていきました。

その後「春」の季語である「紙風船」や「風車」でちょっと遊んでから俳句作り。動きがあり、音も聞こえてきた遊びに子どもたちはにこにこ。つぶれた紙風船が、ポンポンついているうちに膨らんでいく様子に目を丸くしていました。

以下、句会に出された俳句を紹介します。



- 『お茶を飲む苦さとうまさ江戸の味』
- 『春が来た手を温めて茶の香り』
- 『あたたかいこいみどり色茶の香り』
- 『寒い冬体温まるお茶の味』
- 『紙風船つぶしてしまってもたもどる』
- 『紙風船パンてたたくと雪とけた』
- 『友達とポンポン遊ぶ紙風船』
- 『昔遊びこども喜ぶ紙風船』
- 『花が咲く春を見上げる立春だ』



なかよし学級在籍の児童が、自分の感じたことにぴったり合った言葉に出会ったときの表情、友達から褒めてもらったときの笑顔が素敵でした。